

第12回村野藤吾賞受賞作品

サン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂の再生

作者 田窪恭治

サン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂は、16世紀にイギリス系貴族によって建設された。それは、パリから北西 200km余、ノルマンディー地方ファレーズ市の近郊、人口 380人のサン・マルタン・ド・ミュー村のはずれにある。

1828年、司祭がここから去ったあと、1985年に地方自治体の手で部分修復が行われたものの、礼拝堂として使われることなく廃墟となっていた。田窪氏がこのノルマンディーの片田舎の荒廃した礼拝堂に出会ったのは1987年暮れのことである。打ち捨てられたままの礼拝堂の屋根は破れ、それを支えるための小屋組は露出し、その素朴で力強い龍骨の隙間からはノルマンディーの陽光が漏れ、その荒れた床に残る墓碑銘を清めていた。そして入り口の前面に 600年を超える厳かな生命の力を見せて立つ“いちいの大樹”と礼拝堂との素朴な優しさの交響に直面し、氏は強い衝撃と感動を受けた。そしてこの礼拝堂の再生を夢見て、独自に構想を巡らし、それを習作化することがはじめられた。

1988年、箱根彫刻の森美術館での田窪恭治展は、サン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂再生プロジェクト習作発表第一回のものとなった。

1989年、地縁の全くないファレーズ市に家族を伴って移住し、10年間の時を過ごすことになった。現地や日本の各地で礼拝堂再生プロジェクトのエスキースの発表を繰り返しつつ、このプロジェクトを遂行するための資金づくりや、ファレーズ市での史上初の日本人家族として、人間関係の問題を克服して行かなければならなかった。そしてここで重ねられていった数多くの人びとの真実の時間が「単に芸術とか建築という特定のジャンルを超えて、もっと社会的意味での広がりを持ちはじめています。…… サン・ヴィゴール・ド・ミュー礼拝堂は、誰もが何時か訪れたとき、それぞれの心の中にある世界に会える、そんな場所なんです」と悟る心境を作るために至った。

私たちが実感し得る時間の幅を遙に超えた自然の手による荒廃が、礼拝堂の軀体の中に潜在し続けていた生命力と美しさを氏の心に伝え、この作品への気持ちを高揚させたのである。床は厚いコルテン鋼のブロックで覆われ、壁には鉛の板が張られ、それに7~8色の顔料の層を重ね、素朴な屋根の龍骨には在来の古い地瓦に加えて、赤、青、白、紫……のガラス瓦を混ぜて葺きあげるなどの創作が与えられて、昨年、建築の竣工に至った。

この礼拝堂は、村人はむろんのこと、フランス全土の人びとに深い感動を与えていた。また、広くヨーロッパや日本においても、テレビや他のメディアに多く紹介され、深い感銘を呼び起こしている。そして今でも、鉛の壁面に厚く重ねられた色層を、ノルマンディーの安らかなリンゴ畠と共に鳴しながら鉄筆で削り、氏の内なる世界を掘り起こし続けている。この十余年、作者の全てを捧げ尽くしたその苦闘は、ノルマンディーの小村の静かな優しい光と風となって礼拝堂を潤すのである。

今世紀の末に、私たちの核心にひとつの重要なメッセージを伝える氏のこの仕事を、高く評価したい。

選考委員 池原義郎